

# 否定文末形式の意味と機能

田 中 寛

キーワード

否定文末形式 否定のスコップ 判断留保 複文 文型教育

## 1. はじめに

日本語の文末表現の態様を観察してみると、形態的に見ていくつかの特徴、類型があることに気づく。否定成分を含むさまざまな文型はその大きな領域である。田中（2004b）では否定形式をとる「てならない」「ていられない」「ずにはおかない」などの心情の強調をあらわすモダリティ的な特徴を考察したが、これらは対象そのものの実質的な判断、評価というよりはむしろ情意的な主張をあらわすものであった。本稿では田中（2004a）で一部ふれた「ないではない」「ないものではない」など、より大きな表現単位としての否定文末形式を対象に、文末における否定の意味構造と機能を比較検討してみたい。なお、否定文末形式の形態的な範疇には、

- (1) a. 会議中ですから部屋に入ってはいけません。
- b. 熱があるなら、仕事に行かないほうがいいです。
- c. こちらからわざわざ電話をかけなくてもいいです。
- d. 今すぐ病院へ行かなければなりません。
- e. 疑問を抱かざるをえない。
- f. 重大な事故につながりかねない。

のような複合辞表現も含まれるが、ここでは考察の対象としない<sup>1)</sup>。

以下では大きく〈Xではない〉と〈Xがない〉の二つのタイプに分けて考察するが、その他関連する否定表現についてもふれることにする。これまで本研究領域に関しては、とりわけ前者において工藤（1999）などの詳細な研究があるが、本稿では二つのタイプを相補的に観察することによって、主として複文の主文に生起する否定の性質、および表現意図を教学の観点もまじえながら考察するものである。

## 2. 〈Xではない〉タイプの否定文末形式

ここでは肯定判断の〈Xだ〉（Xは形式名詞，準体言）に対して否定判断をあらわす〈Xではない〉のタイプを概観する。そもそも肯定に対立する否定表現では、

(2) a. 日曜日なので、店は開いていない。(中止) ⇔ 開いている

b. 起きたばかりなので、ご飯を食べていない。(未然) ⇔ 食べている

c. 疲れていて、どこへも出かけたくない。(拒否) ⇔ 出かけたいたい  
など、全面否定も含めて恒常的に存在するが、ここで扱うのはこうした肯定を意識した、あるいは認識・概念の対極としての否定ではなく、むしろ否定そのものがある主張、ないし判断（拒否，拒絶を含む）をあらわすものとする。また、個々の用法の検討を通じて、言い換え，修正といった機能に着目してみたい。なお、〈Xではない〉の判断において〈Xでもない〉のように柔らげ，曖昧な言い方になる場合も少なくない<sup>2)</sup>。

---

1) 語彙の側面からは「院内感染が後を絶たない」，「日焼けクリームを欠かさない」，「状況は予断を許さない」，「避けて通れない」，「いなめない，否定できない」，「許されない」といった慣用的な否定表現も多く観察されるが，本稿の対象からは除外される。なお，否定の諸相については太田（1980），山田（1997），王（2003）などを参照。

2) 主張を柔らげるという「婉曲」の姿勢には待遇的な配慮が認められる。当然ながら対話資料なども視野に入れるべきであるが，今回は書き言葉を対象にデータを限定した。



## 2.1 <Xのではない>の用法

いわゆる「のだ」の否定であるが、「の」にはおよそ二種類の性格が認められる。

(3) a. 私がミールアン（黄麵）を注文したのではない。山田が注文したのだ。

b. ミールアンは私が注文したのではない。ミーキオ（緑麵）が注文したのだ。

(3) a. 「のではない」は「私が注文した」事実の否定であるが、(3) b. 「のではない」の「の」は対象の代行で、実質的な対象「(私が注文した)モノ」に充当する。「のだ」「のではない」にはこうしたスコープの問題が潜在し、

(4) a. 新聞を読むのではない。雑誌を読むのだ。

b. 人に言われてやるのではなく、自分からやるのだ。

のように、「新聞」、「雑誌」というモノの選択であったり、「人に言われてやる」のか「自分からやる」のかといった、行為の選択をあらわすケースもあれば、

(5) a. これはもらったのではない。私が買ったのだ。

b. この部分は引用したのではなく、自分で考えたのだ。

のように主張全体にかかるものがあり、従来から「のだ」における「の」の曖昧さを反映する事例となっている。一方、「のではない」は「のだ」の対立から解放されて、むしろ次のように聞き手に対して禁止、制止を求める言い方としても用いられる<sup>3)</sup>。

(6) a. 男のくせに、泣くんじゃない。

b. 社会に出ても、くじけるんじゃないぞ。

また、「ではなかった」は「のだった」が過去時にそうすべきであったという後悔の気持ちをあらわすのと同様に、過去時における行為が現時

---

3) 「立つんだ」(励まし)「言うんだ」(詰問要求)のような「のだ」の詠嘆的用法をふくめ、「のだ」の詳細については野田(1997)などを参照。

点からみて妥当なものではなかったという後悔の念を回想して述べる言い方として用いられる。

(7) あんなサービスの悪いホテル、泊るんじゃなかった。

cf. そんなにサービスのいいホテルだったら泊るんだった。

一般に「Vルんだった」は「Vルべきだった」, 「Vルんじゃなかった」は「Vルべきではなかった」, のようにパラフレーズされる。なお,

(7)' あんなサービスの悪いホテル、泊らないんだった。

のように「の(だ)」の前接に否定があらわれ得るが、やや許容度が低くなると同時に、意味的なずれも生じる。また、「Vタのだ／Vタのだった」と「Vナカッタのだ／Vナカッタのだった」などのヴァリエアントも観察され、当為と主張、詠嘆との弁別的な意味も重層的に生起するが、ここではこれ以上、「のだ」の本質には立ち入らない。

本稿の考察対象となる「のではない」の修正、言い換えの用法は、主として言い切りの文末形式としてあらわれる。当然ながら、これにはテンスも介在し、たとえば「新聞を読まなかった」を「のだ」であらわすと、

(8) a. 新聞を読んだのではない。雑誌を読んだのだ。

b. 新聞を読まなかったのだ。?雑誌を読んだのだ。

のような二種類の言い方が可能である。(8) a. では「新聞」という対象、あるいは「新聞を読んだ」という行為事実を全面的に否定し、(8) b. はそもそも「新聞を読まなかった」という事実を主張する立場をあらわしている。また、言い換えの方略としては、前文に「のではない」がきたほうが許容度は高い。以下、事例で検討する。

(9) 釣師ははらりと手をかけて棧橋の上に飛び上がり、一瞬顔をしかめた。向う脛を打ったのではない。或る想念が彼を捕えたのだが、それは言葉に表して他人に説明しにくいものだった。(曾野綾子「切りとられた時間」)

(10) スラッガーは本塁打によって強さを増すのではない。おそらく三振の数を抱えた思いが、自らを磨くのだろう。(朝日新聞04.4.6)

(11) 讀賣も産経も国旗・国歌に対する一般国民の意思表示を問題にしているのではない。あくまでも公立学校の卒業式における教師の態度として処分に値すると主張しているのだ。(朝日新聞04.4.13.)

〈Xのではない。(というより／むしろ) Yのだ〉のように後には(より妥当性の高い)言い換えの文が続くのが普通である。「あくまで」「むしろ」といった副詞が後文文頭に置かれることもある。次は過去の出来事、事態に対する判断の修正としてあらわれたものである。

(12) 自殺の原因となると残された家族たちは口をつぐんだ。妻や両親や子供たちが何かを隠している、というのではない。そうではなくて彼らは自殺した夫や息子や父親が国鉄という職場の中で何をしていたのか、何に悩んでいたのかをほとんど知らないのだった。(吉岡忍「死よりも遠くへ」)

後文は「必要である」などの適否を選択する言い方によっても結論づけられる。

(13) 政治再生の責任は首相や与野党だけにあるのではない。有権者一人ひとりが各党の主張を吟味し、投票日に備える必要がある。(讀賣新聞04.6.25)

〈Xのではなく、(というより／むしろ) Yのだ〉のように前文が中止の形になっても、言い換えや主張の選択をあらわすことには変わりはない。

(14) 今思えば、父は虫の報せで家族のことが気にかかったのではなく、どこかで吉蔵と知り合い、ちよがちょうど女郎に売るのがいい年頃になっていることに気付いて帰って来たのだろう。(津村節子「娼婦たちの暦」)

(15) 原因は単に看護婦等が誤って破棄したなどの事情によるのではなく、何者かが少なくとも正規の医療目的ではない何らかの不法な目的であえて持ち出したことによるものと確認するのが相当である。(朝日新聞04.3.31)

〈Xではなく〉はしばしば後文に「べきだ」、「必要だ」、「たい」といっ

た当為や希望・願望をあらわす文があらわれる。認識の対比・比較が同時に話し手による事態の限定、選択を要求するケースである。

(16) 高裁では理念や形式だけにとらわれるのではなく、行政の実態も踏まえて審理を尽すべきだろう。(讀賣新聞04. 4. 28)

(17) 医師は報道の制限を望むのではなく、患者にしっかり向き合い、不安を取り除いていくべきだ。(朝日新聞04. 4. 27)

(18) 性について教えることを避けるのではなく、一部の教師の価値観を押し付ける突出した性教育でもなく、生き方や性の倫理についても子供に考えさせる性教育でありたい。(讀賣新聞04. 4. 14)

しかるべき根拠を受けながら、〈Xのではない〉全体が主張内容となる場合もある。

(19) 頭蓋や喉元の甲状軟骨の損傷はなかった。頭を殴られたり喉を締められて殺されたのではないらしかった。(吉岡忍「死よりも遠くへ」)  
〈Xないのではないが〉の形で、前触লের的にあらわれる場合がある。次は「(ない) わけではない」に近い用例である<sup>4)</sup>。

(20) ただし、江和自身は恐ろしく不潔だった。着換えを持たないのではないが、神父が注意しない限り、着物を着換えるということを思いつかないらしい。(曾野綾子「切りとられた時間」)

このほか、やや定型化したものでは〈Xというのでもなく〉、〈XのでもYのでもない〉などが観察される。曖昧な意志表示、行為の様態をあらわす。

(21) 誰を送るというのでもなく、人々は船の出る日にはこうして棧橋へやって来るのかもしれない。(曾野綾子「切りとられた時間」)

(22) 無理やりに死んだんでも、喜んで死んだんでもない。それは皆、後から説明してる言葉よ。(曾野綾子「切りとられた時間」)

---

4) 次のような「のではない」も「わけではない」に近いが、一方「だけではない」にも言い換えが可能である。

しかし、この作品に力があると感じられるのは、それが現実起こった出来事であるからというのではないように思われる。なにより、監督であるボン・ジュノのドラマ作りが巧みなのだ。(朝日新聞04. 4. 6)

## 2.2 <Xわけではない>の用法

<Xわけだ>は<Xのだ>の用法とも隣接し、前述内容に関してその成立を説明するもので、<Xないわけだ>もこれと基本的には同様に機能する。多くが前文に原因理由節をとまなう。

- (23) a. アメリカに二十年住んでいたというから、英語がうまいわけだ。  
b. いま出かけたそうだから、電話してもいないわけだ。

こうした<X（ない）わけだ>は話し手の納得をあらわし、<X（ない）はずだ>の当為、確認の用法とも類似している。一方、<Xわけではない>は部分否定として機能し、<Xないわけだ>との言い換えができない。また、<Xわけではない>は前述<Xのではない>と重層的であるが<sup>5)</sup>、次のような共起的な文型は特徴的な用法の一つである。

- (24) 故郷にこだわったからといって、ジョイスが「望郷」の作家というわけではない。（讀賣新聞04.4.28）  
(25) 風呂を後にしたからと言って、食事を待ちかねていた訳でもなかった。（曾野綾子「切りとられた時間」）  
(26) 建物が壊れたからといってその借金が帳消しになるというわけではない。ローンは支払い続けなければならない。（讀賣新聞04.6.18宮本輝「にぎやかな天地」）

<Xからといって、Y（という）わけではない>は次のような類義文型を構成する。

- (27) a. お金があるからといって、何でもできるとはいえない。  
b. お金があるからといって、何でもできるとは限らない。  
c. お金があるからといって、何でもできることにはならない。

「からといって」のほかに前文に「といっても」などもともなうことがあ

---

5) <Xのではない>、<Xわけではない>は同様に説明注釈をあらわすが、「わけ」がしばしば「訳」と記されるように後者において具体的な対象（行為、事象）の意識が強く見られる。この双方の用法、異同については従来からもっとも議論の集中するところだが、談話構造や待遇的配慮の視点からもなお研究の余地がある。

る。

(28) お酒は飲まないといっても、全然飲めないというわけではない。

一種の断定保留を基底とする〈Xわけではない〉の用法は、広く分布する。以下、实例にそって見ていくことにする。まず、〈YのであってXわけではない〉の後文は、前述〈YのでXのではない〉とほぼ同義である。

(29) 選挙結果を正確に言えば、有権者は弾劾に反対したのであって、大統領を支持したわけではない。(朝日新聞04.4.17)

〈Yのだから、Xわけではない〉のように、原因理由節が前に置かれることもある。

(30) 「と言っても、やっぱりおまえのところへ来るんだから、女嫌いというわけでもなからう」(津村節子「娼婦たちの唇」)

(31) 東大を出て、最大手の教科書会社からナンバーワンの進学校に勤めたのだから、裏道を歩いたわけではない。(古山高麗雄「二十三の戦争短編小説」)

また、条件節を含む前件を否定する形式としてあらわれることもある。

(32) ゴミ袋を下げて降りてゆけば、必ず会えるというわけではない。(日野啓三「夢を走る」)

(33) フランスや米国のエリート大学院を卒業すれば、倒産しかけた大企業を立て直せる能力が身につくわけではない。(読賣新聞04.6.18)  
〈Xわけではないが〉、〈Xではなく〉が前文に置かれて、観察、認識が不十分なさまをあらわす。一種の弁解、言い訳として機能することも多い。

(34) はっきり約束した訳じゃないけど、仕事の様子を見て、一旦は戻ってくるんだらうと私は思ってたの。(曾野綾子「切りとられた時間」)

(35) 女に異性としての関心を持ったわけではないが、自分の過去を承知の上で結婚してもよいという女の気持ちに感謝の念を抱いた。(吉村昭「仮釈放」)

(36) 他人の不幸を喜ぶわけではないが、大手の倒産は需給のバランスを回復させ、それによって相場が上昇する。(吉村昭「仮釈放」)

(37) 犯罪件数は増え、未解決の凶悪事件も多い。少年事件も多発している。すべてが小泉内閣のせいだというわけではないが、経済も明らかに悪くなっている。(讀賣新聞04. 4. 25)

(36), (37) などのように留保を示しながらも、それとなく本心を述べたり迂言的に内実を主張する言い方も少なくない。〈Xわけでもないのに〉の形では後文の主張はより強くなる。

(38) 外国人たちを喜ばせ、自分たちの生活も潤い、誰にも迷惑をかけているわけでもないのに、なぜ泥棒のように逃げ隠れせねばならないのか、お七はそれが不服でならなかった。(津村節子「娼婦たちの暦」)

また、〈Xわけでもない〉の前文に「が」、「ても」のような逆接をあらわす接続助詞があらわれるケースも少なくない。(40) では「ことにはならない」という主張を含意する。

(39) 男は雇用主から秋山の伝言をきかされ、一応安堵はしたらうが、それで不安がすべて拭い去られるわけではなかった。(吉村昭「仮釈放」)

(40) イラク全土に戦闘が拡大し、自衛隊派遣の前提が崩れた。だから、撤退させててもテロに屈するわけではない。(讀賣新聞04. 4. 24)

〈Xわけではない〉が前述内容を補うように強調的に用いるケースがある。結果論として一種の弁明に解釈されることも多いようである。

(41) 当時は審議会の委員も学校週五日制と総合学習の導入に燃えていた。省が勝手にやったわけではない。(朝日新聞04. 4. 6)

(42) 一方、小泉首相は同日夜、今回の山崎氏らの訪中について、「政府から依頼したわけではない。(政府とは) 全く関係ない」と改めて強調した。(朝日新聞04. 4. 6)

「とくに」「そもそも」「ただ」「実は」、「そのもの」などの副詞、修飾語彙は「わけではない」を柔らげたり、強めたりする。以下のように、話し手の心情を吐露したあとに説明が続くのが普通である。

- (43) 彼は特に衛生観念が発達している訳ではなかったが、その風呂に入ることははばかられた。(曾野綾子「切りとられた時間」)
- (44) システムそのものは突然変異と自然選択で作られたわけではない。新しいシステムが立ち上がる時は突然変異と自然選択以外のメカニズムが必要なのだと思う。(日本経済新聞04. 4. 11)
- (45) そもそも回転ドアそのものが悪いわけではない。建物の内部と外部の環境を隔てるのに優れている。(中略) ある意味では合理的で機能的な建築の道具立ての一つだ。(朝日新聞04. 4. 13)
- (46) じつをいへば、われわれはまだ、「消費社会」といふものの内容を十分に知ってゐるわけではなく、消費といふ概念そのものについてすら、満足にあたひする定義を手にいれてゐるわけではない。(山崎正和「柔らかな個人主義の誕生」)
- (46) のように「わけではない」を繰り返すケースも見られる。この場合は「わけでもない」のように「も」があらわれることも少なくない。
- 弁解や牽制をあらわすのも、〈Xわけではない〉の主要な機能である。
- (47) 元社員は「疑問を持たなかったわけではないが、会社幹部も承知していると考え、拒めなかった。今思えば馬鹿なことをしたと後悔している」と…(朝日新聞04. 8. 7)
- (48) 実のところ、ばくも秘密な面をそう詳しく知ってるわけではありま  
せん。(松本清張「北の詩人」)
- 「ただ」「もっとも」などをともない、一旦出された印象、見解についての留保をあらわすことがある。
- (49) 大企業だけでなく、中堅・中小企業でも新卒採用枠をこれまでより増やそうという意欲が見られる。ただ、これがそのまま実際の採用増にはつながるわけではない。(読賣新聞04. 3. 26)
- (50) 痛む歯ははやく歯科医院で引き抜いてもらった方がよい。もっとも、彼の場合、歯を抜くことによって安静が得られるわけではない。(吉行淳之介「砂の上の植物群」)



二重否定〈Xないわけではない〉も婉曲的な判断留保の典型である。読み手、聞き手に対して何らかの事情背景を想起させる点において、「わけ」の特徴が見られる。また(52)のように柔らげの「も」が頻用される。

(51) 小藤は男の耳に熱い息を吐きかけながら、その手を取って自分の体に導いた。男は女に馴れているとは言えなかったが、女を知らぬわけではないようだった。(津村節子「娼婦たちの暦」)

(52) 「…個人的には少しやりすぎたという反省もないわけでもない」と、神妙な態度を示さざるを得なかった。(読賣新聞04.5.7)

(53) 三党合意については、「非常に短い時間の中で決断を迫られた。もっと時間をかければ、という思いもしないわけではない。手続き上問題はあがるが、ぜひご理解をいただきたい」(読賣新聞04.5.11)

(54) 予感がないわけではなかった。 と言うよりはそのことが頭にこびりつき、二年ほど前から待ちこがれるような気持ちになっていた。(吉村昭「仮釈放」)

## 2.3 〈Xものではない〉の用法

〈Xものだ〉(「もんだ」や終助詞をともなうものも含む)は形式名詞「もの」の原理原則的な意味から、肯定形で普遍的な傾向、忠告、諦念など詠嘆の気持ちをあらわす。

(55) a. 学生は勉強するものだ。

b. 人生にはいろんなことがあるものだ。

また、次のように過去の回想や、眼前対象に対する感慨をあらわす。

(56) a. 子どもの頃はしょっちゅう母を困らせたものだ。

b. 少し見ないうちに、大きくなったもんだなあ。

〈Xものだ〉の前接部分が否定された〈Xないものだ〉は、

(57) a. 会社に入りたてのころは何をやってもうまくいかないものだ。

b. タイ人は人前で相手を非難しないものだ。

のように傾向をあらわすこともあれば、

(58) 私が若い頃はめったに風邪など引かなかったものだ。

のような回想、感慨の用法も同様に観察される。一方、〈Xものだ〉に対立する否定形式には〈Xものではない〉があり、〈Xないものだ〉とほぼ言い換えが可能である。

(59) a. 男の子が人前では泣くものではない。

b. 男の子というのは人前では泣かないものだ。

(59) a. は「が」の指示によって、対象に向かって直接言い諭すニュアンスがあるのに対して、(59) b. は「(というの) は」によって、一般的な道理として諭すニュアンスがある。

以下では〈Xものではない〉が〈Xないものだ〉と言い換えができない独自の用法について観察する。まず、〈Xものではない〉には可能形に接続してその可能性を否定し、同時に資格外の評価を提示する言い方がある<sup>6)</sup>。

(60) a. まずくて食べたものではない。

b. いい加減な内容で、聞いたものではなかった。

次も補助動詞「切れる」をともなった、不可能な事態の強調である。

(61) 雪に足をとられて逃げ切れるものではないし、逃げられたとしても港町から県庁のある市に通じる単線の電車は雪解けまで不通になって町は孤立するのだ。(津村節子「娼婦たちの暦」)

当為の否定の「べきではない」を含意する場合もある。

(62) 弥生鮎を出ると、「まだいいんだね」と男が念を押した。遊び馴れていないんだな、と鬱陶しい気分になった。私は商売だから帰ったりしないけれど、女に考えさせたり同意を求めたりするものではないのに。(津村節子「娼婦たちの暦」)

「決して」という話者の主張を強調することも少なくない。次は「て」(または「ては」)の条件節をともなうケースで、可能性の小なることを主張・提言する。

---

6) 「日本の若者もまんざら捨てたものでもない」のように副詞成分とともに一定の評価を表す用法も見られる。

(63) 自力の限界を見失って、虎の威を当てにする外交は長続きするものではない。(朝日新聞04.4.6)

(64) ギリシャのカラマンリス首相は「これは単独の事件であり、五輪準備の安全性を脅かすものでは決してない」と火消しに懸命だ。(読賣新聞04.5.7)

(65) 構造改革は単に技術的な経済活性化策に留まるものではない。(日経新聞04.4.11)

個々の立場や一般的な道理を主張する際も、「ものではない」が使用される。

(66) われわれは決して朝鮮の自主的独立を邪魔するものではない」(松本清張「北の詩人」)

(67) もっとも、人の生き方の根本にかかわるこういう問いは、言葉によって答えようとしてもなかなかうまくいくものではない。(二宮正之「私の中のシャルトル」)

〈(…が) Xればよいというものではない〉はやや定型化した言い方で、話し手自身による一種の訓戒、批判をあらわす。

(68) 長期政権は政治の安定のためには望ましいが、長ければよいというものでもない。(朝日新聞04.4.6)

〈Yというものは〉を受けて、〈Xものではない〉が通念的な判断をあらわす場合がある。判断よりは感慨寄りの評価である<sup>7)</sup>。

(69) 古参社員が苛められるのは見ていて気持ちのいいものではない。

(70) それに旅館の浴衣などというものは誰が着ても見よいものではないが、特に若い女の子には似合う筈はなくて、(津村節子「娼婦たちの暦」)

---

7) このほか〈Xものではない〉の文体的特徴としては例えば裁判の判決文などにも見られ、一種のフォーマルな結論、言明をあらわす。

本件各犯行が未必的な殺意に基づくとの前提をとる限り、(略)…などの事情があるとしても、ただちに被害者が犯人であることと矛盾するものではない。(読賣新聞04.3.31)

〈Yからといって、X（という）ものではない〉も「ものではない」の一貫性を主張する典型である。〈Xわけではない〉への接近が見られる。

- (71) なにしろ無才男が、急に大作家の子になったからといって、次から次へと本がかけるというものでもない。(窪島誠一郎『信濃デッサン館日記』)

語彙的な否定表現「たまったものではない」は前文内容を「ては」によって受けることが多い。

- (72) 一流大学を出て司法試験に合格し、さて弁護士になってはみたものの、依頼人は金の亡者か離婚調停を求める男女ではたまったものではない。(柳美里「仮面の国」)

「わかったものではない」も語彙的な否定表現で、強い感情をふくませたものである。

- (73) …しかし、社会と遮断されている塲の中で何が行なわれているかわかったものではないという不信感を国民に与えたことは否定できない。(読賣新聞04.7.21)

二重否定表現〈Xないものでもない〉は躊躇する心情をあらわす。「(忠告し)ないではいられない」が能動的であるのに比べて、消極的、受動的な姿勢をあらわす。

- (74) 表立って言いたくはないが、一言忠告しないものでもない。

## 2.4 〈Xことではない〉の用法

〈Xものではない〉の「もの」が多く抽象的な概念を意識したのに対し、〈Xことではない〉の「こと」は個別の事態、事柄を具体的にさすことが多い。「ことだ」は「必要だ」「大切だ」という意味をあらわす。

- (75) a. 困ったときは先生に相談してみることだ。  
b. 授業を聴くときはメモをとっておくことだ。  
c. 牛のようにただ黙々と生きることだ。

〈Xないものだ〉と同じように〈Xないことだ〉も〈Xことだ〉の否定形

として広く使われる。警告、忠告のほか、決意をあらわす場合がほとんどである。

(76) a. 人込みの多いところへは行かないことだ。

b. 今回の失敗はこれから絶対に忘れないことだ。

もう一つの否定形〈Xことではない〉はこうした「ことだ」の否定ではない。たとえば(76)の「ないことだ」を「ことではない」に言い換えると、非用に近いものになる。

(77)\* a. 人込みの多いところには行くことではない。

\* b. 今回の失敗はこれから絶対に忘れることではない。

〈Xことではない〉は前述〈Xのではない〉と同様、修正、選択をあらわす。以下、実例によって検討すると、まず〈Xことではない〉の語彙的な用法として、慣用的な言い回しが見られる。〈Y {こと／の} はXことではない〉の形をとることが多い。

(78) 年頃の娘のいる家には吉蔵のような男がどこからともなく現われて、娘を連れて行くのはこの村で珍しいことではない。(津村節子「娼婦たちの暦」)

(79) ましてや選挙後の政局と世論が「二極化」し、中間勢力が「真空化」している状況のもとではそうした亀裂を収斂することは容易なことではない。(讀賣04. 4. 14)

(80) 痛みに鈍感であることは許されることではない。(讀賣新聞04. 4. 25)

(81) 「私個人でどうこうするということではない。責任回避ではなく、閣僚とはそういうものだ」(石破防衛長官)(讀賣新聞04. 5. 11)

(82) 捜査当局の心配は理由のないことではない。(朝日新聞04. 5. 20)

(83) …日本語の最近の変容については、人間が使う道具である言葉の变化は、今に始まったことではない、と述べた。(朝日新聞04. 5. 20)

「並大抵のことではない」、「大したことではない」、「心配するほどのことではない」、「人間がすることではない」「言わないことではない」なども、

むしろ語彙的レベルの否定表現といえよう。

なお、「こと」が「もの」と言い換え可能な場合がある。

- (84) 面接と言っても、なにも固苦しいことではない。顔を見せにゆけばそれでいいのだ。(吉村昭「仮釈放」)

## 2.5 〈Xべきではない〉の用法

〈Xべきだ〉という当為の否定で、「Xないほうが懸命だ、筋だ」とする主張、警鐘を表す。「Xことがあってはならない」のように、ありうべき事態を先取し、敢えてこれを否定するといった姿勢を表す。

- (85) 企業に順法経営を徹底させるとともに、不祥事を起こした会員企業への重い処分をためらうべきではない。(読賣新聞04.5.28)

- (86) この混乱した事態を冷静に踏まえれば、無理をして年金改革、国連法案を国会で成立させるべきではないだろう。(朝日新聞04.5.20)

- (87) 日本としては拉致、核、ミサイルの問題が解決しない限り、国交正常化はありえないのだ、という原則と信念をもち、姿勢を揺るがせるべきではない。(読賣新聞04.5.25)

- (86)、(87) のようにある前提のうえに立って、主張を述べることも多い。

〈Xべきではなく〉のように文中にあらわれることもある。

- (88) 故郷へ行こう、と彼はつぶやいた。完全に自立するためにも自分の過去に眼をそむけるべきではなく、いつまでもおびえて生きてゆくことはたえられない。(吉村昭「仮釈放」)

〈Xべきではない〉は前文に逆接の「ても」をとまうことがある<sup>8)</sup>。

- (89) 彼らはどんなことがあっても、銃を捨てるべきでないと考えていたから、銃を担うことにのみ懸命であった。(新田次郎「強力伝・孤

---

8) 制止表現「てはならない」が「べきではない」のような意図で用いられることがある。

無差別テロは人類への脅威であり、どのような言い分があるにせよ、許されてはならない。(朝日新聞04.4.6)

島」)

(90) 殺人者を指して世間のひとが「あいつは狂っている」「人格障害だ」と騒ぐのはいたしかたないとしても、いやしくも心理学者ともあるう者がマスコミ情報だけで診断すべきではない。(柳美里「仮面の国」)

(91) 恩赦が稀有であることも率直に口に出してもらい、夢をもつのはいいとしても、それを実現させようとして性急な態度をとるべきではない、とも言ってもらおうと思った。(吉村昭「仮釈放」)

なお、もう一つの否定形式〈Xないべきだ〉は一般にやや不自然である。

(92) ??あなたはここにいないべきだ。⇒…いるべきではない

これに関連して〈Xはずではない〉は非文になるケースがほとんどだが、〈Xはずではなかった〉の形では話し手の発話時点から見て過去時の行為の妥当性を否定する文として成立する。同時に、いわゆるダブルテンスとして「はずだ」の用法も並行して見られる<sup>9)</sup>。ただし、この場合は〈Xなかったはずだ〉のほうが自然である。

(93) ??そんな重大な機密事項なら軽々しく話したはずではなかった。

⇒そんな重大な機密事項なら軽々しく話さなかったはずだ。

〈Xはずではなかった〉の特徴は後悔の念をあらわす言い方である。「こんなはずではなかった」は一種の定型表現である。

(94) こんなことになるぐらいなら、手伝ってあげるはずではなかった。

なお、否定形式〈X(ない)はずがない〉については後述する。

## 2.6 〈Xどころではない〉の用法

多くが前文に「とき」、「のに」節をとらない、事態の急迫する状況下で、現実の行為の非妥当性を述べる言い方である。間接的な制止、禁止を表す。

---

9) ダブルテンスについては高橋(1994)などを参照。松木(1994)も話者の視点から「はず」の用法を考察している。なお、「ないはずだ」と「はずがない」については森田(1988)の先駆的研究がある。

(95) a. 地震のときには、食事をしているところではない。

b. 大事なときなのに、酒なんか飲んで落ち着いているところでは  
ありませんよ。

現在の事態についての言及であることから、前接は「ている」形がほとんどであるが、基本形も見られる。

(96) 何でも、聞いて驚くところの騒ぎじゃなかった。

「どころではない」と類似的な表現に「～場合ではない」、「～ときではない」がある。

(97) 試験の前なのに、映画など見ている場合ではないだろう。

(98) 「ラストサムライ」なんか観てるときじゃないぞ! (朝日新聞04. 4. 6)

なお、アスペクトをあらわす「ところ」はほぼ同じく機能する「ばかり」と同様に、否定文末文型を構成しない。

(99) ??a. いまから出かけるところではない/??出かけないところだ。

(←今から出かけるところだ)

??b. テレビを見ているところではない/??見ていないところだ。

(←今テレビを見ているところだ)

??c. 先週ロンドンに着いたところではない/??ロンドンに着かなかったところだ。

(←先週ロンドンに着いたところだ)

## 2.7 <Xではない>の用法

本節の最後に残された<Xではない>の用法について検討する。まず<X>が語彙的なレベルを見てみると、

(100) 見せ物じゃない、他人事ではない、冗談じゃない、人間じゃない、嘘じゃない、不思議ではない、例外ではない、目じゃない、気が気ではない、何でもない、縁起でもない、屁でもない、…

などがある。また文末の語彙的な用法では、



(101) この事件の遙か以前から〈少年法〉を改正すべきだと発言し、人権派と対決してこられた小田氏に敬意を表するにやぶさかではないが、…（柳美里「仮面の国」）

などが見られる。一方、前提用法として機能する言い方では、

(102) a. 自慢じゃないが、僕は徹夜なら三日ぐらいは平気なんだ。

b. ほかでもないんだが、金を少しばかり貸してくれないか。

〈Xではない〉は名詞述語文としてあらわれるのが基本だが、次のように節の中にもあらわれる。

(103) 酒瓶は台所にではなく、書斎の棚の奥にあった。（曾野綾子「切り取られた時間」）

(104) 一時の気運に従ってではなく、長い歴史の経験に照らし、また国際常識の中で検討しておくべきではなかろうか。（朝日新聞04. 4. 6）

引用的否定の特徴から「というの」が介在することもある。次は原因理由の言い換えである。

(105) 成田には現在、約三十カ国の航空会社が乗り入れ待機中だが、それは日本に旺盛な航空需要があるからであって、成田が使いやすい空港だからではない。（日本経済新聞04. 4. 11）

選択、言い換えに関連して自問自答型の〈Xかといえば、そうではない〉のような言い方もある。呈示された前言〈X〉を結果的に否定する言い方である。

(106) …観客の心をつかむのは、人間のもつ可能性がこれほどあることへの「人間讃歌」、また、そういう人間を生み出した「神への讃歌」が自然に浮上するからだろう。仕事や経営にしても、そこまです目標にしているかといえ、そうではない」（朝日新聞04. 4. 6）

〈Xではないが〉は一種の関連事項を提示するにあたっての一種の前触れ表現である。

(107) 酒井順子のベストセラーエッセー「負け犬の遠吠え」ではないが、男をめぐる独身女性の複雑な心理がテーマになっている。（読賣新

聞04. 4. 28)

〈Xじゃあるまいし〉はこれと対極的な言い方である。

(108) ガキの使いじゃあるまいし，何度も呼び出されてはたまらない。

(109) 「何も泣かなくなつていいじゃないか。子供じゃあるまいし。それにしても綺麗な睫だな」(吉行淳之介「砂上の植物群」)

(110) 下っ端の若い者ではあるまいし，体面だってある。名誉は保持したい。(松本清張「北の詩人」)

文中において、しばしば〈Xではなく〉が〈X (という) のではなく〉，〈X (という) わけではなく〉の代用として機能することがある。

(111) 女は、こちらへ、と言った。別の入口から中庭を通して奥の離れへ連れて行った。しかし、上にあげるではなく，そこで待っていてくれ、と言った。(松本清張「北の詩人」)

二重否定〈Xないでもない〉は一部肯定，一部否定の曖昧な判断留保の表現である。

(112) 白馬に登ると昨夜は言っていたのに，急に帰る気になった石田の気持が小宮には分からないでもない。(新田次郎「強力伝」)

(113) 女は光を避けているように見える。自分がここ迄連れられて来たことの意味もよくわからないらしい。後れ毛が頬に散って、そう言えば気狂いらしく見えないでもないもなかった。(曾野綾子「切りとられた時間」)

〈Xようでもない〉は「ようには見えない」の意味で用いられる。

(114) 武林は息子の経営するスーパーマーケットでも卵を安く売っているが、それで売上げが増しているようでもない，と答えた。(吉村昭「仮釈放」)

〈Xではない〉の形式のなかで累加の意味をあらわす〈Xだけではない〉，〈Xだけではなく〉は比較的使用頻度が高い。

(115) 米軍にとってファルージャ作戦はメンツのためだけではない。(讀賣新聞04. 4. 21)

- (116) その次に神父が聞いたのは叫びだった。いや、叫びだけではない。  
大波の如きものが人々を薙ぎ倒したように思えた。(曾野綾子「切りとられた時間」)
- (117) 自衛隊の役割に関しては、「日本の防衛だけでなく国際的な平和協力の枠組を考える必要がある」との指摘もあった。(讀賣新聞04. 4. 28)
- (118) 八六年の噴火と同じ規模の噴火は一九一二年と五〇年に起きている。前回は三原山火口だけでなく予期せぬ山腹の噴火が起きた。(讀賣新聞04. 5. 11)

〈Xではない〉が述語表現の形式をとるものとして、たとえば「ほうではない」がある。「ないほうだ」も可能ではあるが、一般的ではない。

- (119) a. 彼は数字に強いほうではない。  
cf. ??彼は数字に強くないほうだ。  
b. 彼は酒は飲めるほうではない。  
cf. ?彼は酒は飲めないほうだ。

このほかにも、〈X〉の項に形式的な名詞が介在するケースが見られる。

- (120) たしかに危い地点に立っているとはいえるが、絶対にのがれられないという状態ではなかった。(松本清張「北の詩人」)
- (121) もはや成立、不成立のメンツといった問題ではない。半年急いで成立させるべき問題でもない。(朝日新聞04. 5. 20)

当該名詞成分は前例のように「という」などをともなうことが多いようである。「段階ではない」「立場ではない」「時機ではない」などもこの類型である。

なお、「で(は)ない」の形で擬古調の命令をあらわすことがある。

- (122) これこれ、そこへ入るで(は)ない。

〈Xでもない〉は「の」「というの」などを介することなく、直接基本形、過去形に用いる。「XでもないYでもない」のように並列的に用いることも多い。

- (123) a. 行くでもない, 行かないでもない。  
 b. 高いでもない, 安いでもない。(高くもないし安くもない)  
 c. 嬉しいというのでもないし, かといってつまらないというのでもない。  
 (124) その山田も林和君ではないか、と言ったきり、彼に話しかけるでもなく, そこに佇むでもなかった。(松本清張「北の詩人」)

### 3. 〈Xがない〉タイプの否定文末形式

次に命題を連体修飾によって形式名詞のあらわす概念所在をめぐる形式を取りあげる。総括的に見れば、「ない」という述語を共通とする所有否定構文であるが、対極的に「ある」構文が背景として存在する場合と存在しない場合とがある。なお、2. 〈Xではない〉において「は」のほかに「も」が分布したように、このタイプも「が」のかわりに「は」、「も」が分布している。一般に「が」は個別的事態の判断、「は」は普遍的な背景、道理的な主張、「も」は断定の柔らげをあらわす<sup>10)</sup>。

#### 3.1 〈Xことがない〉の用法

頻度をあらわす場合と過去の非経験をあらわす場合がある。「ことがあ  
る」の否定である。

- (125) a. 京都へ行ったことがない。  
 b. 彼は今まで時間に遅刻したことがない。  
 (126) a. 遅刻することは(まず) ない。(頻度の否定)  
 b. いつ電話をしてもいることがない。(；いない)

二重否定表現「ないことはない」では一部否定をあらわす。

- (127) a. 行かないことはない。(行くこともありうる)  
 b. 行かないこともない (行くかもしれない)

10) こうした文型にあらわれる「が」「は」「も」の分布と配慮、期待感などの性質については、前タイプ同様、より広範な調査と綿密な分析が必要である。

「は」のかわりに「も」を使えばより迂言的な可能性の判断留保となる。

また、文末が過去形であらわれると、

(128) 以後、彼は彼女に会うことはなかった。

のように「語り」としてあらわすことがある。「こと」は「機会」といった意味である。(129)は最上級の言い方である。

(129) 私はずっと抱きしめていた。この子が生まれてから、こんなにしっかりと抱いてやったことはなかった。(曾野綾子「切りとられた時間」)  
〈(わざわざ) Xことはない〉が主体行為の自制、自戒をあらわすことがある。

(130) いま、風呂に入って醜い体をさらすことはない。(渡辺淳一「愛のごとく」)

一方、聞き手目当てとして咎め、反撥などをあらわす言い方がある。自らに向かって言う場合は自制的な表現になる。「が」は非用で、「は」、「も」しか使われない。

(131) 「一人で待たされたからといって、なにも男と寝てくることはないだろう」(渡辺淳一「愛のごとく」)

(132) 出所などせず、独房と印刷工場の間を行き来する日々を送っていれば、このように涙を流しながら歩くこともないのだ。(吉村昭「仮釈放」)

ここで注意したいことは、「ないことだ」は「ことはない」には言い換えられても、「ことではない」が成立しない点である。たとえば、

(133) ここに引きずり込まれてはならない。足を踏み外さないことだ。(松本清張「北の詩人」)

の後文の「足を踏み外すことはない」は許容されるが、「足を踏み外すことではない」は本来の意味から逸脱する。本稿最終章でも確認するが、こうした〈Xないことだ〉と〈Xないことではない〉が必ずしもペアになっていない現象は〈Xつもりだ〉の否定が〈Xつもりはない〉のように異なる構造のタイプをとることと合わせて興味深い。

また、語彙的な表現である「大したことはない」,「思い残すことはない」などの「こと」はある種の規定事項を指しており、実質的な性格をおびている。(134)は慣用的である。

(134) 短い末吉の生涯を思うと不憫だが、生きていてもどうせろくなことはない。(津村節子「娼婦たちの暦」)

「二度と～ことはない」などの形で今後、起こり得る可能性が非常に低いことを示唆する。「決して」「一生」「今後」などのほか、「実際に」「当分」などの副詞も多用される。過去形によってある種の余情、余韻を残す言い方としても用いられる。

(135) ジョイスは二十二歳で「自発的亡命者」として欧州大陸に渡り、五十八歳で死ぬまで再び故国に住むことはなかった。(讀賣新聞04. 4. 28)

(136) 当時の常務は強度不足以外の結論を出すよう文書で指示。その結果、「危険情報」は約二年後のリコールまで外部に発信されることはなかった。(讀賣新聞04. 4. 24)

(137) さすがにテレビなどで騒がれた直後の異常な状態は落ち着いたが、カルテを改竄した美貌の女医がいる病院、というイメージは消えることはない。(讀賣新聞04. 4. 14 渡辺淳一「幻覚」)

〈Xことはない〉が状況の推移に対して、「絶対に」「決して」という判断を含意し、確信をあらわすことがある。

(138) 菊谷は養鶏場の経営が破綻をきたすことはないという肥沼の言葉に安堵を感じていた。(吉村昭「仮釈放」)

反対に「ことはあるまい」など推量のモダリティをとめないながら、将来の信憑性についてやや留保の気持を認めるケースもある。

(139) 今後、そのことについては問いかける相手は死を迎えるまで現れることはなさそうだし、菊谷は唯一の機会を失ったのを感じた。(吉村昭「仮釈放」)

(140) 路上からみた通夜の様子から察して告別式の会葬者は多いにちがいはない。

なく、自分が紛れ込んでも人の注意をひくことはあるまい、とも思った。(吉村昭「仮釈放」)

- (141) 石炭産業特有の背景事情を踏まえた慎重な判決で、他の公害や薬害訴訟へただちに波及することはないだろう。(讀賣新聞04.4.28)

二重否定表現〈Xないこともない〉は一旦認めたことへの判断保留の言い方である。(141)は〈Xないわけではない〉とほぼ同義である<sup>11)</sup>。

- (142) いずれも高価なものにはちがいがなかったけれど、ガラガラと耀く装身具をじっと眺めていると、祭の夜店に並んでいる安手の玩具に見えないこともなかった。(津村節子「娼婦たちの暦」)

- (143) …そうした歴史を紡いできた人の世のつくりだす五輪もまた美しいだけのものではありえない。政治や金にもままれてきた。もう、戻れないかとも思うが、全くできないこともないだろう。(朝日新聞04.4.6)

〈X (ことはあつ) てもYことはない〉もやや文法化した言い方である。

- (144) だが、同社は他のデータをもとに「亀裂があつてもすぐに破断して脱輪に至ることはない」としてリコール不要と結論づけていた。(朝日新聞04.4.6)

- (145) 雪も滅多には降らず、降っても家の中まで吹き込んで来ることはない。(津村節子「娼婦たちの暦」)

〈Xことはない〉は単なる否定とは異なり、「いつも」「とくに」「あえて」などの取り立て的な行為を印象づける特徴がある。

- (146) Nさんは真面目で几帳面だったし、仕事でうまくいかない、ということもなかったはずだ。(吉岡忍「死よりも遠く」)

- (147) 刑務所の作業場から夕方、房にもどった時と同じような寛ぎを感

---

11) 次のような「なくもない」は「ないこともない」の短縮形である。

こんどのことだって、そんな私のユダン心とナマケ心を、びしゃりとこらしめてくれた貴重な教訓といえなくもない。(窪島誠一郎『信濃デッサン館日記』)

じ、畳の上に座ったまま、階下の食堂にあるテレビを観にゆくこともなかった。(吉村昭「仮釈放」)

〈Xこともなく〉の形で文中にあらわれることがある。

(148) 園田は何があっても驚かない男である。船がおくれても別にくさることもなく、田倉が病気してもそれに較べて自分の健康を秤にかけようとすることもしない。(新田次郎「強力伝・孤島」)

なお、〈Xこともなく〉は「ずに」の意味で附帯修飾節を構成する。

(149) 政府は脅しに屈することなく、人質の救出に全力を傾注すべきである。(讀賣新聞04.4.24)

### 3.2 〈Xものがない〉の用法

「～ほど～ものはない」で次のように評価強調をあらわす用法がある。

(150) まことに、性の繋がりがほど強固なものはない。(渡辺淳一「愛のごとく」)

(151) もっともらしい口調と冷ややかな拒絶ほど子どもを苛立たせるものはない。(柳美里「仮面の国」)

また「何ひとつ」などの不定詞をとまって全面否定をあらわす場合がある。

(152) 嵐の去った島には、何ら、心を惹くものはない。(曾野綾子「切り取られた時間」)

二重否定表現〈Xないものはない〉で全面肯定をあらわす。〈Xないことはない〉が一部否定であったのと対照的である。「もの」は実質的な総称、総体を示す。

(153) a. 食べない物はない：何でも食べる

b. 行かない者はない (いない)：誰でも行く

### 3.3 〈Xはずがない〉、〈Xわけがない〉の用法

話し手の事態の実現、成否にかかわる確信をあらわす。主体の確信を代



行することも文脈によってはありうるが、ほぼ一般的な命題、共有通念としての提言である。「はず」は実質的な意味がきわめて薄いこともある。なお、肯定形の〈Xはずがある〉、〈Xわけがある〉は非用である。

(154) a. あの人がこんな立派な計画書を書けるはずがない。

b. こんなに高ければ、(誰だって) 買うはずもないだろう。

二重否定表現「ないはずがない」で「絶対に～はずだ」の強調表現になる。「はず」で注目すべき点はいわゆるダブルテンスを有する点である。「はずがない」は「はずがなかった」を派生させ、発話者の視点によって次の四種のバリエーションをもつ。

A [行く／行かない] はずがない

: 発話時点から行為者の将来時を予想

B [行った／行かなかった] はずがない

: 発話時点から行為者の過去時を予想

C [行く／行かない] はずがなかった

: 発話完了時点から行為者の過去時の意志を予想

D [行った／行かなかった] はずがなかった

: 発話完了時点から行為者の過去時の完了を予想

一般に前提条件として証拠立てを必要とすることから、前件において「のだから」「れば」節などをとめないやすい。「ことなど考えられない」という意外な局面の否定である。

(155) a. 確かにここに置いたんだから、見つからないはずがない。

b. 努力すればできないはずはない。

(156) 心にも沿わず、割にも合わず、駈けずり回る自分への代償が、僅かな日々の糧のみであっていいはずがない。(朝日新聞04. 3. 31)

(157) 妻帯といっても恩赦を受けぬかぎり死ぬまで保護観察を受けなければならぬ身であり、しかも過去に二人の女の命をうばった男のもとに嫁いでくるような女がいるはずがない。(吉村昭「仮釈放」)

「からこそ」「ので」「れば」「て」などの従属節をとまなうケースもある。

(158) 「人命は地球より重い」というからこそ、本来、政策変更などと天秤にかけられるはずがないのである。(讀賣新聞04. 4. 24)

(159) 消費税率を正面から議論しないでこれからの社会保障の姿を描けるはずがない。(讀賣新聞04. 4. 25)

(160) いかに強力なぐんたいがあろうと、占領した国の人々の心を踏みにじり、逆なでしては自由も民主化もまともに根づくはずがないのだ。(朝日新聞04. 5. 5)

(161) 服役したことのある者たちの中には、過去を秘して妻をめとる者もいるにちがいない。しかし、自分は終生、保護観察下におかれる身であるので、かくし通すことなどできるはずはない。(吉村昭「仮釈放」)

(162) やって良いことと悪いことの区別がついていないのではないかと生徒たちを疑わなければ生活指導など出来るはずがないのである。(柳美里「仮面の国」)

〈Yからといって、Xははずがない〉も連文的な構造をもって話者の主張をあらかず。

(163) 日本が常任理事国になったからといって、核保有国になる義務などあるはずがない。(讀賣新聞04. 9. 2)

「など」は「などXははずがない」のようにも「Xはずなどない」のようにも付随する。一方、二重否定表現〈Xないはずはない〉はより確信的な気持ちを含めて主張する<sup>12)</sup>。

(164) たとえ一部の兵士の犯行であろうと、それが名誉と誇りをことのほか重んじるイスラム教徒の反米感情を刺激しないはずはない。(朝日新聞2004. 5. 5)

認識の中でおよそ「極端な事例」と意義付けられる場合、「など」をとまなうことがある。

---

12) 「届いているはずだ」と「届いていないはずがない」を比較すると、後者の二重否定には話し手の聞き手に対する詰問の調子が感じられる。

- (165) 家庭生活は安定し、性生活も満ち足りていて染め物の仕事に日々を過ごしている恵美子が彼の釣り仲間である望月とひそかに情交をむすんでいることなどあり得るはずはなかった。(吉村昭「仮釈放」)
- 類似的な言い方として〈Xわけがない〉がある。「わけ」は「道理」を意味して、その意味が見出せない、認められないことを意味する。前件に条件節をとまうことが多い。
- (166) 社会の安全が保証されずに経済が発展するわけがない。(朝日新聞 04.3.31)
- (167) もしこの世が人間が創ったものなら、どんな戦争の最中といえどもあれほどの非人間的な要素が出現する訳はなかった。(曾野綾子「切りとられた時間」)
- (168) もし、あの経歴が彼に洩らされていれば、彼はこのようなことを教えるわけがなかった。(松本清張「北の詩人」)
- なお、〈Xわけにはいかない〉は婉曲な不可能をあらわす。
- (169) 初対面の、名も知らぬ男の子にコーヒーを奢らせるわけにはいかないので、私はレジの前で少し争った。(津村節子「娼婦たちの暦」)

### 3.4 〈Xつもりがない〉の用法

意志の否定で、「ないつもりだ」も同じように用いられるが、「つもりがない」のほうが強い感じがある。通常、「が」よりも「は」が多用される。

- (170) a. わたしは彼と結婚するつもりはありません。  
           cf. わたしは彼と結婚しないつもりだ。  
       b. あなたにこれ以上話すつもりはない。  
           cf. あなたにはこれ以上話さないつもりだ。

「ルつもりはなかった」は、過去時の実行行為を真意に背く過失的なものとして認めたいときに用いる。回想的な気分がある。「つもり」は「意志」に即した実質的な意味合いが強い。「ナイつもりだった」は当時の時点で「そういうつもりでいた」という特殊な文脈の支持が必要で、一般性からは

逸脱する。

(171) 殺すつもりはなかった。

cf. ?殺さないつもりだった。

#### 4. 否定のタイプと質問文

本稿で考察した否定表現の二つのタイプを整理すれば次のようになる。

〈Xではない〉タイプは文全体の命題を否定するという指向性から〈文枠〉的な否定であり、〈Xがない〉タイプは底名詞を否定するという否定的特徴から、〈文核〉的な否定と意義付けることができるだろう。否定成分はほぼ前方、後方にあらわれ得るが、後者の〈文核〉的な否定のタイプでは、前方否定形式において非用のもの(\*印)が見られる。

##### 〈文枠〉的な否定のタイプ

前方否定形式：Xないのだ、Xないことだ、Xないものだ、Xないわけだ、Xないはずだ、?Xないべきだ

後方否定形式：Xのではない、Xことではない、Xものではない、Xわけではない、Xはずではない、Xべきではない

##### 〈文核〉的な否定のタイプ

前方否定形式：Xないことがある、Xないものがある、\*Xないはずがある、\*Xないつもりがある

後方否定形式：Xことがない、Xものがない、Xはずがない、Xつもりがない

なお、後方否定形式の場合、多くが二重否定構造をもち、柔らげの「も」をとまうこともある。

次にこの二つのタイプにおける質問文の成否について確認しておきたい。一般に〈Xではない〉タイプはほぼ次のような質問文の成立が観察される。

- X {ではない (の) /ではなかった (の) …} か
- X {のではない /のではなかった…} か
- X {はずではない (の) /はずではなかった (の) …} か
- X {べきではない (の) /べきではなかった (の) …} か
- X {ことではない (の) /ことではなかった (の) …} か

これらの質問文にはそれぞれ〈Xではなかっただろうか〉などのように推量の「だろう」がともなうことも少なくない。ただし、〈Xものではない〉、〈Xわけではない〉については一般に上記のような質問文は成立しない。

これに対して〈Xがない〉タイプでは〈Xことがない〉を除いては、ほとんどの場合、質問文が成立しない。〈\*Xものはないだろうか〉などのように「は」を用いたり、「だろう」が介在しても同様である。これは〈Xがない〉タイプと〈Xではない〉タイプの構造的な相違点の一つと考えられる。

- X {ことがない /ことがなかった…} か
- ??X {ものがない /ものがなかった…} か
- ??X {はずがない /はずがなかったか…} か
- ??X {わけがない /わけがなかった…} か

これらの用例については膨大な集計分析を必要とするため、詳細な検討は割愛せざるを得ないが、外国人日本語学習者のなかには使用上の混乱をきたす要因となるかもしれず、今後、教学上の整理が望まれるところである。

否定の性格をめぐる、〈Xではない〉タイプは一般に事実事態の成否関係をめぐる、むしろ客観性を含意する特徴が観察され、〈Xがない〉のタイプにはむしろ話し手の意志的、推量的なモダリティの性格があらわれ、主観性の高い特徴が観察される。ただ、こうした特徴は大方の傾向であっ

て、今後、よりいっそうの考察を進める必要がある。

## 5. おわりに

本稿の考察で、二つの否定形式には形式名詞を核にしてある種の平行性が観察された。たとえば、「ことではない」・「ことがない」、「ものではない」・「ものはない」のような関係であるが、一方「つもりはない」「までもない」などにはペアになる形式が存在しない。こうした点も形態的な関心がもたれるところである。文型教育にあたっては、次のような「わけではない」と「わけがない」などの混用にも注意を払う必要がある。

(172) お金があるからといって何でもできる {わけ／はず} ではない。

cf. ? {わけ／はず} がない。

(173) 習ってもいないのに答えられる {わけ／はず} がない。

cf. \* {わけ／はず} ではない

筆者はここ数年、中上級日本語学習者の文法の授業を担当し、文型教材をどのように扱うべきか、日夜試行錯誤しているところである。文型研究では当該項目だけにとらわれても不十分で、指導に際しても副詞などの周辺の共起成文をはじめ、接続と文末叙述の関係をつぶさに観察していく必要がある<sup>13)</sup>。

本稿では形式名詞「の」「わけ」「もの」「こと」などを〈核〉として、否定の生起する文型的な構造を検討した。そこでは前後に生起する接続成分、副詞成分なども特徴的に観察された。個々の構文的な分析については不十分な点も少なくない。引き続き、考察を続けていきたい。なお、否定文末形式にはこのほか、

(行く) までもない、(行く) しかない、(行く) ほかない、(行く) 以外にない、(行き) ようがない、…

---

13) こうした日本語教育における文型教育の観点については田中 (2004c) などを参照。また、文型認定にあたっては「文法化」という範疇をめぐってさらなる議論が求められる。

のような限定表現や、

(行き) もしない、(行き) はしない、(行か) なくはない、  
といった絶対、相対(婉曲)否定形式なども見られる。引用形式では、  
(行く)とは言えない、(行く)とは限らない、(行く)ことにはならない、  
なども使用頻度が高い。また、〈Xがない〉タイプの類型として、  
～法はない、～すべがない、～ためしがない、～兆しがない、  
～必要はない、～いわれはない、～資格はない、～保証はない、  
さらには、特殊否定表現ともいうべき、

(泣く)に(泣け)ない、(鳴ら)そうにも(鳴らせ)ない  
のような不可能表現も見られるが、これらについても別の機会をもうけて  
論じたい。

日本語の文末表現は形態的にも意味的にも複雑な様相を呈し、日本語の  
曖昧さにおいてもしばしば言及されるところである。文法化の進み具合に  
よって、またその条件づけによって、文型の範囲や枠をどのように判定す  
るのかは、文法分析と深く関わる重要なテーマである。主要な形式をまず  
明確に位置づけ、さらに周辺にある個別的な形式の記述を丹念にすすめる  
必要がある。同時に「わけではない」のように単独であらわれることは少  
なく、むしろ複文との共起性が多く観察されることから、前後の文脈のな  
かでどのように分布するのか、類義表現、複文における出現分布などに気  
をつけることも大切である。

附記：本稿をなすにあたり、英国ロンドン大学 SOAS 東アジア言語文化学科助教授  
バルバラ・ピッツィコーニ博士との議論から有益な示唆を得た。記して感謝申し上  
げる。否定表現と待遇的な意図との関係はなお分析不十分であるが、今後の考察の  
機会にゆだねたい。なお、本研究は平成16年度大東文化大学長期海外研究の成果の  
一部である。

#### 参考文献

王学群 (2003) 『現代日本語における否定文の研究』 日本僑報社  
太田朗 (1980) 『否定の意味』 大修館書店

- 工藤真由美 (1999) 「現代日本語の文法的否定形式と語彙的否定形式」『現代日本語研究』6号 大阪大学
- 坂本宗和 (1999) 「『ない』文の用法について 接続詞『しかし』に関わる連文からの一考察」『国学院雑誌』100-6 国学院大学
- 高橋太郎 (1994) 「ダブルテンスの観点からみた<スルコトガデキル>の種々相」『立正大学文学部紀要』100号
- 田中寛 (2004a) 『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』白帝社
- 田中寛 (2004b) 「“心情の強調”をあらわすモダリティ形式と命題の評価性」『語学教育研究論叢』21号 大東文化大学語学教育研究所
- 田中寛 (2004c) 「文法研究と文型研究—日本語教育文法を視野に置いて—」『大東日本語教育論集』第6号 大東文化大学別科日本語研修課程
- 野田春美 (1997) 『の(だ)の機能』くろしお出版
- 松本正恵 (1994) 「『はずだった』と『はずがない』 過去形・否定形と話者の視点」『学術研究 国語・国文学編』早稲田大学
- 宮島達夫・仁田義雄編 (1995) 『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版
- 森田良行 (1988) 『日本語の類意表現』創拓社
- 山田小枝 (1997) 『否定対極表現』多賀出版
- 『月刊言語』特集:[例解] 否定の意味論 2000. 11. Vol. 29-11 大修館書店
- 『月刊言語』特集: 文法化とは何か 2004. 6. Vol. 34-6 大修館書店

#### 用例出典

\* 本文例文中下記の表示のないものはすべて筆者の作例による。

窪島誠一郎『信濃デッサン館日記』(講談社文庫1986), 曾野綾子『切りとられた時間』(中公文庫1975), 津村節子『娼婦たちの暦』(集英社文庫1988), 新田次郎『強力伝・孤島』(新潮文庫1965), 二宮正之『私の中のシャルトル』(ちくま学芸文庫2000), 日野啓三『夢を走る』(中公文庫1987), 古山高麗雄『二十三の戦争短編小説』(文春文庫2004), 松本清張『北の詩人』(角川文庫1983), 山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』(中公文庫1987), 柳美里『仮面の国』(新潮文庫1998), 吉岡忍『死よりも遠くへ』(新潮文庫1989), 吉村昭『仮釈放』(新潮文庫1988), 吉行淳之介『砂の上の植物群』(新潮文庫1990), 渡辺淳一『愛のごとく(上)』(新潮文庫1984), 朝日新聞, 読売新聞, 日本経済新聞